

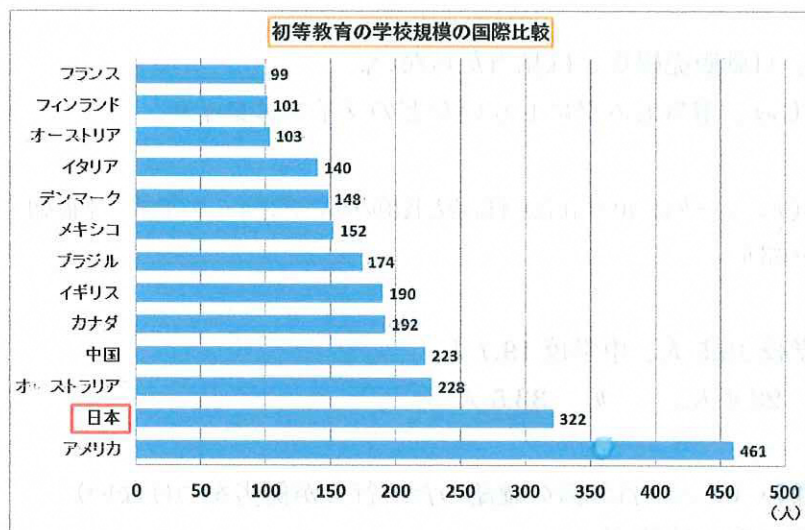
「小さな学校」「小さなクラス」が世界の流れ（2013年2月13日）

1. 日本の小学校の学校規模は諸外国の2～3倍

統計資料としては少し前のものになりますが、「ユネスコ文化統計年鑑 1999」によれば、外国の学校規模（初等教育）は100～200人程度。しかも1学年1学級でクラス替えがないのが一般的です。

それに対して日本は、300人を超えています。諸外国の2～3倍もの規模なのです。

アメリカは、日本を越えています。無理な学校統廃合で学校規模が拡大し、学校の荒廃が広がったことの反省から現在では小さな学校の意義が見直され、**10人台にさらに縮小したほうが学力向上に効果がある**



※「ユネスコ文化統計年鑑 1999」より作成

2. 「小さな学校」「小さなクラス」の方が教育効果が高い

1) 諸外国で学校規模が小さいのは、それだけ教育効果が高いからである。

⇒「**小さな学校**」「**小さなクラス**」ほど、**学習意欲や態度が積極的**になり、子どもたちの**人格形成・人間的成長**にとっても**効果的**であることが実証されている。

2) 学校・学級の規模と教育効果の関係についての研究報告としての根拠

① 学校の規模が小さいほど教育効果が高まることを実証した「コールマン報告」（1966年）

② 学級の規模が小さいほど教育効果が高まることを実証した「グラス・スミス曲線」（1982年）

◎WHO（世界保健機関）は、**生徒100人を上回らない学校規模を勧告**している。2013年

自殺問題・いじめ問題・落ちこぼれが著しい日本に改善を求めた。

⇒これからの時代、単なる知識の詰め込みだけの受身の教育では役に立たない。

⇒知識を応用し、いろいろな課題解決に取り組む力、

⇒集団の中で自らの能力を主体的・積極的に発揮する力が求められる。

⇒そうした力を培うには、小さな学校が有効なのである。

3. 学校規模を小さくする世界の流れに逆行し、**学校経費の効率化**のため学校規模を維持もしくは大きくしようというのが、いまの日本での学校統廃合の動き、1つの学校の児童・生徒数が480人～720人というような校世界に例を見ない大規模校をめざしていることを見逃せない。

◎財務省は、こうした結果、「**小中合計で約170億円の効率化**」ができたとして「成果」を強調し、今後、地方自治体や国をあげて学校統廃合を促進させる方向を提起している実態。

◎私達は、鴻巣市財政を潤すための統廃合に反対～！「**教育は、未来への投資である**」

【教育と学校規模の国際比較】 小学校の統廃合を考える 講演要旨(2012年8月) 三輪定宣(千葉大学名誉教授)

1. 諸外国の教育と学校規模

1.) ドイツ

①ドイツでは、**子ども一人ひとりに向き合い、意見表明、自己主張を大事にし、学力だけでは評価されない。**

⇒現状の小中高校の学級規模は、現在20人程度だが、**現場では10人以下を強く要求。**

⇒「**人間の価値は人数が多くなるほど下がる**」との思想の現れ(小・中学校の平均学校規模は200人程度)。

②教育制度：大学の学費は無償、給付制奨学金が支給され(親と別居なら生活費支給)、交通費、旅費、観覧料等は学生割引で安く利用できる。

③教育環境：夜間コンビニ、ビニールハウス、自動販売機などは見当たらない。

⇒午後5時頃には店を閉め、家族で夕食を楽しみ、電気もムダにしないなどのライフスタイル。

2.) **デンマーク** 千葉忠夫・日欧文化交流学院学院長(デンマークに40年在住)『格差と貧困のないデンマーク 世界一幸福な国の人づくり』(2011年3月)の一部の紹介

① 1学級当たり児童生徒数比較

デンマーク：1学級当たり児童生徒数;小学校 19.5人、中学校 19.7人。

日本： " 28.4人、 " 33.5人

② 小学校も教科担任制。

③ 「国民学校を卒業する9年生まで試験がない(テストは知識の確認のため行うが優劣をつけない)。

⇒9年生の試験は口述試験が主である(問題は自分が選ぶ)。

※「**義務教育期間中は他人と競い合うことを教えない**」

④ 「1年から6年までほとんどクラス替えはないため、同じ担任で進級」

⇒「教師の学校間の移動は無し」

※**優秀な教師**の定義：「**落ちこぼれをつくらない教師**」

⇒落ちこぼれとは?：①**勉強の遅れ** ②**登校拒否をするような子**

※デンマークの教育の中で大切にしている事：『**学び方を学ぶ**』を主にしている。

※欧米では、一般に1学年1学級でクラス替えがなく、担任教師も持ち上がりが基本。

⇒教師は公立学校でも同一校に定年まで務め、子どもや家庭の環境を熟知している。

3.) **オランダ** 2010年1月13日NHK教育テレビ「子どもはなぜ幸福度世界一か」で、NO.1のオランダの子どもについて放映。

子どもの幸せ度ランキング：オランダの子どもが世界一「幸せ」と感じる理由 **2020年**も1位
学校では?

① 行き届いた条件・環境

⇒クラスでは**20人以下**の子どもが**4~5台**のテーブルに**4人ずつ**対面で座って勉強する。

② 子どもの自由・自律の尊重

⇒小学生でも1週間単位で**自分の考えたメニューで教科を選び、好きなことが勉強できる。**

⇒休憩、教室を出ることも自由、宿題がない。

③ 子どもどうしの学び合い・教え合いが中心。

④ 受験競争・塾からの解放

⑤ 家庭では、家族との団らんの時間がたっぷりあり、親子がよくわかりあえる。

⇒週2回家族揃っての夕食：両親が6時には帰宅できるワークシェアリング制度等がそれを社会的に支えている。

4.) **フィンランド**

①フィンランドの学校規模

⇒初等 101 人、中学校と高校は併設で 100~200 人程度

⇒教員 1 人の子ども数：小学校 15.8 人、中学校 10.6 人

※小規模の学校・学級で協同学習（ともに学び合う学習）が行われている。

②OECD（経済協力開発機構、30ヶ国加盟）の国際学力テスト

（PISA=国際学習到達度調査、65ヶ国・地域、15歳対象のフィンランドの4回（12年間）の成績順位
（2009年12月7日、2009年実施の第4回結果発表）

⇒科学 2/2/1/2 位、数学 4/2/2/6 位、読解力 1/1/2/3 位。

※日本は科学、数学、読解力とも、フィンランドよりかなり低い。

③OECD のめざす学力（リテラシー）

⇒知識の単なる記憶量ではなく、その**応用力、思考力、問題解決能力などを大事**にした授業。

※21世紀社会に求められる知的能力：**少人数の協同学習が有効**であり、**国際学会でも立証**されている。

5.) **キューバ**ユネスコが、フィンランドとともに推奨するカリブの教育大国。教育重視の国

①キューバの国際テスト（数学）の学力は、ラテンアメリカ諸国平均 50 点として**キューバ 90 点**、

②学級規模：少人数学級（**小学校 10 人、中学校 15 人以下**） ⇒小規模学校で協同学習

※教師の給料は**医師並みで高額**（教師が大事にされ、社会的地位も保障されている）。

結論

教育学（理論）の世界の流れ：基本的条件として少人数学級・学校が重視されている。

1.) 教師の教授中心から**子どもの学習中心**へ。

2.) 子ども一般から**子ども一人ひとりの個別性**へ。

3.) 一斉・競争授業から**対話・協同学習**へ。

と先進国は変化している。

2. 子どもの幸福度と学校規模

1.) ユニセフ・世界子どもの幸福度調査と国連・子どもの権利委員会が勧告

ユニセフ『豊かな国の子どもの幸福の概観』（全 52 頁、2007 年 2 月）、「子どもへの配慮が国の状態の真の尺度」との観点からの調査であり、対象は OECD 加盟国 30 ヶ国と非加盟国 8 ヶ国、回答は 15 才（高校 1 年）。

① 『私は孤独である（日本の若者の約 30%）』（I feel lonely）と感じている衝撃的な結果

⇒1 位日本 29.8%…2 位のアイスランドの約 3 倍

2 位アイスランド 10.3%…平均 7.4%、

② 「将来なりたいこと」（aspirations）

「非熟練労働」（to low skilled work）に「はい」が日本 50.3%、OECD 27.5%、などが際立つ。

② **幸福度ランキング先進 38 カ国調査 2020 年**

日本の子どもは、「**栄養・健康 1 位**」「**情緒面での健康状態 37 位**」

⇒「**教師との関係の貧しさ**」が目立つ。

⇒2010 年 6 月の**国連・子どもの権利委員会見解**では、その原因である「**極端に競争的な環境**」を回避するため「**学校及び教育制度を見直すこと**」を勧告している。

⇒未だ改善されず、増加している。

2.) WHO (世界保健機構) の学校規模論：学校規模 100 人以下を勧告 「教育は未来への投資である！」

(国連機関、WHO (世界保健機構)、諸調査研究を集約)

「近年、子供の教育機関を組織する際に従うべき原則に関して、有識者による実に多くの著書および報告書が発表されているので、ここに改めて議論する必要はあるまい。

それらはすべて『**大規模な機関においては回避することのできない規則および規制を回避するためには、教育機関は小さくなくてはならない**』 -カーティス報告が提案した**生徒百人を上回らない規模**- という点で意見が一致している。」と述べている。

⇒非人格的な規則ではなく、**人間的な関係に基づいたインフォーマルで個性的な教育**は、こうした条件のもとで初めて可能になる… [教育機関の内部の]集団 (学級など：引用者註) の規模に関しても意見の相違はまったくなく、小さい規模を保たなければならないという考えで完全に一致している。」(カークパトリック・セール、深里文彦訳『ヒューマン・スケール』講談社、1987年)

3.) 各国の学校規模

外国の学校規模の実態：国平均で初等学校 100~200 人程度 (1 学年 1 学級でクラス替えがない) が一般的。

⇒就学期間は 6 年が普通、その前後もあり、一概に比較できないが、以下の通り。

出典：『ユネスコ文化統計年鑑』(1999 年、原書房)。

・1999 年以来、同著の翻訳は刊行されていないが、現在も大差はない。

例)アメリカ 461 人、日本 322 人、オーストラリア 228 人、中国 223 人、カナダ 192 人、イギリス 190 人、ブラジル 174 人、メキシコ 152 人、デンマーク 148 人、イタリア 140 人、オーストリア 103 人、フィンランド 101 人、フランス 99 人など。

・アメリカ：学校統廃合で学校規模が拡大し、「学校内学校」(inner school、校舎ごとにみんなが知り合える運営) や「チャータースクール」(charter school 特許学校、全米約 3,000、少人数) 等の学校改革で対応。

※『**学校を変える力**』(岩波書店)：**生徒の発達には学校規模を小さくする必要**があると提案デボラ・マイヤー (高校長)

⇒学校規模を小さくする 6 つの理由：

① **教師間の対話** ② **共同指導** ③ **個別指導** ④ **生徒の安心感** ⑤ **透明な運営** ⑥ **生徒との交流**

4.) 学校・学級規模と教育効果に関する諸データ

【**コールマン報告**】：アメリカの教育学者ジェームス・コールマンらが 1966 年にまとめた有名な報告『教育機会の均等性』(コールマン報告) …アメリカ連邦政府の 64 万 5000 人の生徒を対象に実施した大規模な教育実態調査

【**学習成果を決定する主要な要因**】

カリキュラムや教師の質以上に「**生徒と学校の一体感である**」と結論づけ、それを育んできた小さな学校の利点を評価。

① **小さな学校**：**子どもの学校への帰属意識、愛着が強くなり、学習への態度も積極的になる。**

グラス・スミス曲線：コロラド大学のグラス・スミス両教授の研究結果(簡単な曲線の公式で表現)

② **学級規模**：1 クラス 25 人位、特に 15 人くらいから学力が急速に上がった。

③ **学習態度・意欲や人格形成に有意義である**(過去 50 年間約 300 の論文を「メタ分析」という方法で検証)

結論

アメリカでは実態が平均 23 人程度なので、それ以下の 18 人以下への改善が研究の焦点である。

(学級規模と教育効果に関する研究)

⇒研究の大勢は「**10 人台にさらに縮小したほうが学力向上に効果がある**」と結論付けた。